

LIBRA SQUARE

Book 最近, おもしろかった本

『インディヴィジュアル・プロジェクト』

阿部和重 著 新潮文庫 380円(税込)

スリリングなストーリー展開に 隠された仕掛け, 得体の知れぬ既視感

2004年の芥川賞作家である阿部和重, 1997年の作品。

カバーの写真につられて買った読者も多いであろうが, 中身も十分にスリリングである。

映画学校出身の主人公オヌマが, 故郷の山形でマサキというよそ者の変人が主宰していた「高踏塾」という私塾を卒業制作のためフィールドワーク的に取材するうち自らその活動に嵌りこんでしまった, その過去についての回想と, 現在進行形で生起する出来事の記録とを, 日記の形で綴っていく…それがこの作品の形式であるが, 最後の最後で, 実はこの形式そのものがストーリーの一部であったことが明らかにされ, これにより, 読者は決定不能性のただ中に置かれることになる。

小説家となった段階で, すでに80年代の「ニューアカ(←死語)」的教養で武装していたという, そんな阿部らしい仕掛けではある。

もう一つ特筆すべきは文章から喚起される得体の知れない既視感とでも云うべきものであろうか。これは, 元・諜報機関の工作員だといった怪しげな経歴を喧伝し, 地元の若い衆

(現在で云うニート?) を集めて心身を鍛錬させると同時に自らの誇大妄想を彼らに吹き込む高踏塾塾長マサキの人物像と, とある私の古い知り合いのそれとがほぼ完全に重なり合うという, まるっきり私的な体験に起因するところもあろうが, かつてはオヌマ同様に映画監督を目指して映画学校を卒業した阿部の文体が, 極めて映像的に構成されていることによるところが大である。誰もが知る大事件がこの作品の題材にされているであろうことは, さほどの意味を持たないのではないか。

日常と非日常, あるいは, 現実と非現実とが激しく交錯していく中で, いつしかその区別が無効化されるに至るストーリー展開は, 現代の日本に相応しくありつつも, 「J文学」などといった口当たりの良い分類には収まりきらないダイナミズムを内包している。

近年文庫化された大作「シンセミア」と並んで, 推薦する次第である。

(会員 古宮 憲一郎)



